

## -Program-

### 1部

#### 『モーツァルトのメヌエット』って？



- ・水上の音楽から『アラ・ホーンパイプ』(ヘンデル)
- ・ディヴェルティメント 17番K334～1・3・6 楽章 (モーツァルト)

### 2部

#### 平和を願う音楽

- ・鳥の歌(カタロニア民謡)
- ・イマジン(ジョン・レノン)
- ・さとうきび畑(寺島尚彦)
- ・世界の反戦フォークメドレー  
～花はどこへ行った(ピート・シーガー)  
～イムジン河(高宗漢)  
～戦争を知らない子供たち(杉田二郎)

### 3部

#### エルガーは大好き？

- ・序奏とアレグロ(エルガー)



## <Stage1>

### 『モーツァルトのメヌエット』って？

#### 1 水上の音楽から『アラ・ホーンパイプ』 (ヘンデル)

1685年のバロック時代中期にドイツで生まれたヘンデルは、ドイツのハノーファー選帝侯の宮廷楽長に就いていましたが、侯が反対する中、1712年にイギリスに移住してしまいました。

ところが、このハノーファー選帝侯がイギリス王ジョージ1世として迎えられることになって、ヘンデルはイギリスで本格的に音楽活動をするようになりました。

イギリス宮廷のテムズ川での船遊びのたびに少しずつ作曲して、3つの組曲にまとめ、全体で20～25曲からなる組曲、後に『水上の音楽』と呼ばれる曲になりました。

当時のイギリスの貴族社会では『ホーンパイプ』と呼ばれる2分の3拍子の舞踏音楽が流行していました。ヘンデルも『水上の音楽』の中にこの形式の曲を2曲取り入れています。

本日演奏する『アラ・ホーンパイプ』、日本では水上の音楽を代表する曲として最も親しまれています。『アラ』は英語で言えば『THE』を意味しているので、「これぞホーンパイプだ!」とでもなりましょうか。

●解説:高橋文明(チェロ)

#### 2 ディヴェルティメント17番K334 1、3、6楽章 (モーツァルト)

モーツァルトは、ディヴェルティメントと呼ばれる、宮廷での宴会を盛り上げる曲を20曲以上作曲していますが、その中から最も有名とされる第17番を取り上げます。

この曲は弦楽5部に2本のホルンが加わり、全体が明るく美しい旋律に富み、流麗・優雅で華やかさがあります。6つの楽章からなりますが、その中から1楽章のソナタ形式からなるアレグロ、3楽章のメヌエット、6楽章のロンド・アレグロを演奏します。

中でも3楽章のメヌエットは『モーツァルト

のメヌエット』と呼ばれ、独立して演奏されることも多くなっています。

●解説:高橋文明(チェロ)

## <Stage2>

### 平和を願う音楽

今年の第2部のテーマは『平和を願う音楽』です。世界中から平和への願いを象徴する曲、反戦のメッセージを伝える曲をいくつか集めてみました。

編曲はいずれも、指揮者の島崎 洋によります。

#### 1 鳥の歌(カタロニア民謡)

スペインはカタロニア地方の民謡ですが、この曲を有名にしたのはチェロの名手パブロ・カザルスです。世界国際平和デーのとき、国際連合本部で開かれたコンサートの最後に彼はこの曲を演奏し、それ以来、世界平和を願う音楽の象徴となりました。

#### 2 イマジン(作曲:ジョン・レノン)

ビートルズ解散後ソロシンガーとなったジョン・レノンの名曲です。本日はバイオリン協奏曲風にアレンジしてみました。「想像してごらん、国境も宗教もイデオロギーの違いも無い世界を。みんながそれを想像すれば戦争なんて起こるはずがない、簡単でしょう！」そんなメッセージです。

#### 3 さとうきび畑(作曲:寺島尚彦)

森山良子さんのギター弾き語りで有名です。ざわわ・ざわわ・という特徴ある歌詞が繰り返される美しい曲ですが、8番 11連からなる長い歌詞には強烈な反戦のメッセージが込められています。本日は縮小バージョンで演奏します。

#### 4 世界の反戦フォークソングメドレー

反戦のメッセージを込めた世界のフォークソングから3曲をメドレーにしました。

それぞれの時代、若者たちの歌声には平和への思いが込められていました。

花はどこへ行った(作曲:ピート・シーガー)  
～イムジン河(作曲:高宗漢)～戦争を知らない子供たち(作曲:杉田二郎)

●解説:島崎洋(指揮・編曲)



## <Stage3>

### エルガーは大好き？

エドワード・エルガーはイギリスの国民的作曲家として敬愛され、行進曲「威風堂々」、チェロ協奏曲など多くの名曲を残しています。

1901年の夏、エルガーがウェールズの海辺で休暇を過ごしていた時、遠くから聴こえてきた民謡をヒントにメロディーをつくり『ウェールズの節』と名付けます。その3年後、ロンドン交響楽団創設に向けて『輝かしく、速いスケルツォ』をテーマに、新作を依頼されたエルガーは、この『ウェールズの節』を用いることを思い付きます。

ソリストの役割を担うカルテットと、弦楽オーケストラを合わせた『合奏協奏曲』の形式で書き進め、翌年に『序奏とアレグロ』を完成させました。

『序奏』の冒頭は力強い第一主題が全奏で示され、次いで対照的に優しく温かな第二主題へとつながります。そして『ウェールズの節』がカルテットのヴィオラ独奏で情緒たっぷりに歌われます。

『アレグロ』は、まさに『輝かしく、速いスケルツォ』といった感じですが、第二主題が長調に転調されて提示され、16分音符が連続する新たな主題も加わり、複雑なフーガを展開します。最後は、再び『ウェールズの節』が現れ、華やかにまとめられます。

●解説:石川朋美(チェロ)